

グリム兄弟の〈母乳メタファー〉：近代市民社会におけるメルヒェンの受容をめぐって

著者	村山 功光
雑誌名	人文論究
巻	71
号	3
ページ	19-41
発行年	2021-12-10
URL	http://hdl.handle.net/10236/00029924

グリム兄弟の〈母乳メタファー〉

——近代市民社会におけるメールヒェンの受容をめぐって——

村 山 功 光

は じ め に

グリム兄弟（ヤーコプ 1785-1863 年，ヴィルヘルム 1786-1859 年）の著述物を読んでいると，いたるところで植物の成長，動物の習性，金属などの無機物，季節の循環や天候などの〈自然メタファー〉が目につく。彼らの研究対象は，ドイツを中心とするヨーロッパの古代・中世文学，言語，メールヒェン（昔話）や伝説などの民間伝承，法，神話や宗教など実に広い分野にわたっているだけでなく，各分野の研究が常にヨーロッパおよびヨーロッパ以外の文化圏との地域的・歴史的比較に基づいて行われているので，その全体像は茫漠とした大海を見るような観がある。それゆえにこそ，その広範で多様な著作群の中に共通し，一貫して繰り返し表れる〈自然メタファー〉は一層際立って見える。文学や言語，法慣習，俗信や宗教心など人間の営み（＝人為（*Kunst*））の産物は，彼らにとっては，〈古代〉において集団の中であたかも植物のように〈自然（*Natur*）〉に生成し，素朴な民衆の間で長年にわたって〈自然に〉，つまり人為的意図の影響なく受け継がれて息づいているかのように思われたのであり，これを表現するために，人間の個性や意志の作用を排するとともに神の摂理が背後に感じられる〈自然メタファー〉は，最適なイメージの供給源だったのである。

メールヒェンについては，『グリム童話集』の序文の冒頭に〈自然メタファー〉が典型的に表出している。

天から遣わされた嵐、あるいは他の災いにより苗がみな地面に叩きつけられてしまったようなときに、道端の低い生け垣や灌木に守られたわずかな地面があり、そこに二つ三つの穂（**Aehren**）がまっすぐに立っている、そのような様を思いがけず見つけることがあります。その後再び太陽が暖かく照ると、それらの穂はひっそりと誰にも気づかれることなく成長を続け、早々と鎌で刈り取られ大きな貯蔵庫に入れられることもありません。けれども、夏の終わりにその穂がしっかりと実ると、貧しい善良な手がそれを探しにやってきます。穂に穂を重ね、丁寧に束ねられると、それは畑の立派な麦束よりも大切に扱われ、家に持ちかえられ、冬の間の食物となります。ひょっとしたら、未来のための唯一の種子となるかもしれません。昔のドイツ文学の豊かさに目を向けたときに、実に多くのものがすでにその生命を失い、それについての記憶さえ失われているのに、ただ民謡（**Volkslieder**）と素朴な家のメールヒェン（**Hausmärchen**）だけが残っていることに気づくのに、それは似ています。¹

民衆が語り継いできたメールヒェンは、— 恋愛文学であるフランス系の妖精メールヒェンや異国情緒豊かなオリエントのメールヒェンが上流階層で愛読されていた一方で — 18世紀後半から続く啓蒙思潮によって女性や子どもの低俗な娯楽として軽蔑されたり、前近代的な迷信の権化として排撃されていたが、通俗的な啓蒙が波及しない田舎、社会の辺境部では近代化の波にかき消されることなく、わずかに細々と生き残っている。— このように考えたグリム兄弟はメールヒェンを、圧倒的で暴力的な悪天候の被害をかうじて免れた畑の周縁部で、意志を持たずただ内的必然性のみ促されて健全に成長を続ける麦の穂に喩えているのだ。ドイツの古代の名残りを伝えるメールヒェンは、この貴重な麦粒のように、精神的な困窮状態 — 近代化による社会の大変革やナポレオンが率いるフランスの支配下での生活が連想される — にある人々の滋

1 グリム兄弟（吉原高志／吉原素子訳）『初版グリム童話集』第1巻（白水Uブックス 2007年）、11ページ。なお、訳語は必要に応じて変えている（以下同様）。

養となり、さらに風前のともし火の民間伝承を将来において再び芽吹かせる力となるというのだ。

グリム兄弟の〈自然メタファー〉は、さらに森や畑などの環境としての緑の自然、生命を潤す水や人間の滋養となる食物、そして古来自然と密接に結びついて生活してきたと考えられた〈民衆 (Volk)〉、すなわちある種の人間にまで拡大して適用されている。兄弟によると、人類史の〈原初〉において人間は集合的かつ無自覚的に活動しており、人間が作り出す文学はいわば植物が大地上から生い立つかのように〈自然に〉、すなわち特定の個人の意図によらず民衆の間で、言語文化を共有する民族全体によって生成した〈自然ポエジー (Naturpoesie)〉であり〈民衆 [民族] ポエジー (Volkspoesie)〉でもあるというのである。

このように兄弟は、メタファーによるイメージに支えられて抽象的な思考を視覚的に具象化し表現した。他方で、自分で表象した図像的メタファーに翼を与えられて連想を展開し、抽象的な思考を具象的に裏打ちしつつ拡張していった。それゆえ、〈自然ポエジー〉に属する文学と考えられたメールヒェンの性質を描写するために用いたメタファーを考察することによって、彼らの思考の特性が浮かび上がってくる。本稿では兄弟が好んだ〈自然メタファー〉の中でも乳、特に母乳のメタファーに着目したい。これは一見、まだ若くて人生経験に乏しい文献学者兄弟による現実離れした空想の産物のように見える。しかしこのメタファーは、〈古来の伝承〉であるはずのメールヒェンをグリム兄弟がすぐれて〈近代的〉に把握していたことを如実に示しているのだ。本稿では、その連関の射程と重層的な意味および問題を 1800 年期の歴史的な文脈の中で解明していきたい。

1. グリム兄弟のイメージ的思考 — 母乳のメタファー

『ドイツ伝説集』(1816/18年)の序文でヤーコプ・グリムは、共に口承の散文であるメールヒェン (Märchen) と伝説 (Sage) の性質の相違を明らかに

し、それぞれの文学ジャンルの定義を試みている。すなわち、メールヒェンは特定の歴史的時間や場所と無関係で語られるのに対して、伝説は史実に基づき具体的な土地や人物と密接に結びついており、人々が話の内容を信じていることが前提となっている。² ここでヤーコプは、両ジャンルの性質を食物の比喩で可視化している。

メールヒェンは外的にはその広範囲の分布のゆえに、内的にはその本質のゆえに、子どもらしい (*kindlich*) 世界観察から生まれる純粋な思想を把捉することを使命とする。メールヒェンはただちに滋養となる。それは乳 (*Milch*) の如く穏やかで好ましい食品であり、蜂蜜 (*Honig*) の如く甘くて、かつ心身を満たす食べ物、この世の重力を脱した糧である。これに対するに伝説はずしりとした料理であり、その色合いは単純だがそれだけ一層明確であり、より真剣に受け取られ、より深く思索されることを要求する。³

伝説はしばしば悲劇的結末に至り重い印象を残すし、具体的な史実および土地の地理や風習に結びついた、現実と超自然的事件が複雑に錯綜した生々しい驚異への理解力を前提とするのに対して、メールヒェンは時間・空間に縛られず、普遍的・抽象的で子どもらしい単純な内容を語っているので、軽やかに直接受容できる。すなわち、伝説は知力を備え一定の年齢を重ねた人々の文学であるのに対して、メールヒェンは乳幼児にも — 言葉の意味内容を理解する発達段階のとは別のレベルで — 受容されうる文学だというのである。ここには、メールヒェンと乳幼児との、そして母との間に親縁性を見る思想が明瞭に表出している。

実際、グリム兄弟は『グリム童話集』を出版するに当たって、小さい子ども

2 グリム兄弟 (桜沢正勝／鍛冶哲郎訳) 『ドイツ伝説集』上巻 (人文書院 1987年), i ページ。訳語は必要に応じて変えている。

3 同上, ii ページ

を持つ友人たちにこのメールヒェン集を薦めている。『グリン童話集』の出版を促し、出版社を紹介したアヒム・フォン・アルニムには、出版前から彼の息子のためにこの本を薦めているほか、⁴『グリン童話集』の献辞は「エリーザベト・フォン・アルニム夫人と小さいヨハネス・フライムント」に捧げられている。⁵ この子どもは出版当時7ヶ月の乳児だった。また、ヤーコブは2人の乳幼児（2歳5ヶ月の娘と1歳の息子）を持つ友人に宛てて、「我々の子どものメールヒェンと家のメールヒェン（Kinder- und Hausmärchen すなわち『グリン童話集』のこと）は、クリスマス・プレゼントには印刷がまだ間に合う予定だ。きみはすべての主婦たち（Hausmütter）に、これ以上に乳のように甘いもの（milchsüßeres）は推奨することはできまい」⁶と述べている。なお、ヤーコブはすでに1808年に、恩師であり友人でもある法学者サヴィニーに宛てて6話のメールヒェン（Kindermärchen と呼んでいる）を子どもに語るよう送っているが、長女ベッティーネは当時3歳、長男フランツは生まれたばかりだった。⁷

メールヒェンを実際に語ること、およびその受容の実践について、ヤーコブは家で家族によって行われる〈自然な〉あり方を称揚し、学校など教育施設で教育者が生徒に語るのとは〈人為的〉だとして、以下のように批判している。その際に、近代市民社会の核家族における〈父・母・子ども〉の関係を暗示する語が使われているのは偶然ではないだろう。

4 Jacob Grimm an Achim von Arnim, 29.10.1812. Reinhold Steig: *Achim von Arnim und Jacob und Wilhelm Grimm*. Stuttgart; Berlin: Cotta, 1904. S. 239.

5 Heinz Rölleke (Hg.): *Kinder- und Hausmärchen. Gesammelt durch die Brüder Grimm. Vergrößerter Nachdruck der zweibändigen Erstausgabe von 1812 und 1815 nach dem Handexemplar des Brüder Grimm-Museums Kassel mit sämtlichen handschriftlichen Korrekturen und Nachträgen der Brüder Grimm*. Bd. 1. Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 1996. S. III.

6 Jacob Grimm an Paul Wigand, 15.10.1812. E[dmund] Stengel (Hg.): *Briefe der Brüder Grimm an Paul Wigand*. Marburg: Elwert, 1910. S. 122.

7 Jacob Grimm an Savigny, 10.4.[1808]; 15.4.1808. Wilhelm Schoof / Ingeborg Schnack (Hgg.): *Briefe der Brüder Grimm an Savigny. Aus dem Savinyschen Nachlaß*. Berlin; Bielefeld: Erich Schmidt. 1953. S. 42, 45; 423ff.

祖国の (*vaterländisch*) 歴史やポエジーは、子ども (*kind*) が学校に足を踏み入れる前、そして学校から家へ帰ってきた時に、いわば母乳 (*muttermilch*) とともに吸い込まなければならないし、家 (*haus*) で語られ、話し合わなければならない。しかし、すべては自然に (*natürlich*)、自ずからなるように。いわゆる教育施設に入っている子どもたちは、昼間ずっと真面目に勉強した後で夕方は何も語り聞かせてもらえないなら、かわいそうだ。というのも、家での両親の親密さ (*heimische elterliche vertraulichkeit*) はこの世で他の何ものにも代えがたいからだ。⁸

ここでは、学校教育を受ける 19 世紀の近代市民社会の子どもたちにとって、核家族の愛情によって結びついた家庭こそ最後の砦だとされている。また、祖国の歴史やポエジーは特定の意図によって誘導されることなく、また他のメディアを介さずに親から直接受容することが理想とされ、そこで乳児に授乳する際の母乳のメタファーが使用されているのだ。

この考えは母語 (*Muttersprache*) の獲得過程にも適用され、学校で文法規則に従って母語を学ぶ教育は〈人為的〉で、破壊的でさえあるとして非難される。

私の主張は次の点に尽きる。すなわち、それ [学校の授業] によってまさに子どもに宿る言語能力の自由な発達が妨げられること、そして、われわれに発話を母乳 (*muttermilch*) とともに流し込んでくれ、両親の家 (*elterliche[n] haus[es]*) に守られて発話に力を発揮させようとする、素晴らしい自然の設備が誤解されているということだ。⁹

8 Jacob Grimm : *Von dem verhältnis altdeutscher dichtungen zur volksthümlichen erziehung. letzte vorlesung über das Nibelungenlied, gehalten zu Königsberg in Preußen von Karl Bessel[d]t* (1816). Jacob Grimm : *Kleinere Schriften*. Bd. 6. Nach der Ausgabe von Karl Müllenhoff und Eduard Ippel neu hrsg. von Otfried Ehrismann. Hildesheim ; Zürich ; New York : Olms-Weidmann, 1991. S. 203.

9 Jacob Grimm : *Vorrede zur Deutschen Grammatik* (1819). Jacob Grimm : ↗

学校などではなく家で、両親と話したり、物語を語ったり、歌ったりしてこその子どもの言語能力は〈自然に〉十全に発達するというのだが、ここで親が子どもに言葉を音声として子どもの耳に語り込む様子も母乳メタファーで表象されているのである。

このように、グリム兄弟による母乳メタファーはメールヒェンの〈自然な〉性質および理想的な〈自然な〉受容のあり方を、視覚的イメージによって具象的に表現している。その際に目につくのは、このメタファーが明らかに親密な母子関係に彩られた近代市民社会の核家族の情景に組み込まれていることだ。そこでは、メールヒェンが語られる場としての家庭、そして語り手としての母親が重要な役割を果たすことが期待されているのである。

2. 栄養のメタファーとしての母乳 — 身体性

グリム兄弟が用いる〔母〕乳メタファーにおいては、まず第一に、乳幼児の栄養源である〔母〕乳と子どもの精神的な糧となるメールヒェンとの間の類似性が念頭に置かれている。〔母〕乳が乳幼児の消化能力に適していて、肉体的成長に必要な滋養物であるように、メールヒェンは子どもの理解力に合った、精神面・感情面での発達を支える養分なのであり、それは不可欠で他のものでは代替不可能だと考えられたのだ。

兄弟にとって、〈自然ポエジー〉であるメールヒェンは〈純粹〉、〈無垢〉なポエジーであり、子ども、特に純真無垢な乳幼児との間には強い共通性が認められる。『グリム童話集』序文では、神の摂理の産物とされる〈自然ポエジー〉であるメールヒェンは、その純粹性を共通項として、次のように純真無垢な子どもそのものに喩えられている。

↘ *Kleinere Schriften*. Bd. 8, 1. [= JGKS VIII/1] Nach der Ausgabe von Karl Müllenhoff und Eduard Ippel neu hrsg. von Otfrid Ehrismann. Hildesheim ; Zürich ; New York : Olms-Weidmann, 1992. S. 30.

素晴らしく、またこの上なく幸せそうに見える子どもたちの純粹さと同じ純粹さが、この文芸にはしみ透っています。メールヒェンも子どもたちも、いわば同じ青みがかった、けがれの無い、きらきら輝く目をしていません。[・・・] 手足などがまだ華奢で弱く、この世の務めを果たすためにはぎこちないのに対し、彼らの目はもう十分に成長しています。¹⁰

そして、この純粹で素晴らしく、至福に満ちた子どもには、純粹な滋養物であるメールヒェンが適切で必要不可欠の飲食物なのだ。「この世 (Erde) の務め」には無縁の、すなわちまだ神に近い位置にいる乳幼児が摂取するメールヒェンは、「この世の (irdisch) 重力を脱し」ていて「ただちに滋養となる」のであり、すでに見たように乳や蜂蜜に比されることによって、神から与えられた天上界の飲食物という性格を帯びている。この乳と蜂蜜の組み合わせは、『旧約聖書』(例えば「出エジプト記」3, 8) で神がイスラエルの民に約束したカナン地方が「乳と蜜の流れる土地 (ein Land, darin Milch und Honig fließt)」¹¹ と、繰り返し呼ばれていることを連想させるのだ。

伝説が「ずしりとした料理」、すなわち驚くべき事件を材料として〈人為的に〉加工したものとされるのに対して、メールヒェンは人の手を加えずに〈天然の〉そのままの形で、〈純粹な〉滋養物として直接に摂取されるという。これは、乳や蜂蜜が他の食材や調味料と混合したり、過熱して調理したりする必要なく完全な食物であり、それ自体で〈純粹に〉摂取することができ、十分な栄養素を含んでいることにも通じていると思われる。この〈純粹〉志向は、ヤーコプが〈人為ポエジー〉には「加工 (Zubereitung)」を、〈自然ポエジー〉を「自発的な生成 (Sichvonselbstmachen)」をそれぞれの特徴と規定し、人間がまだ神の近くにいた始原に起源を持つ〈自然ポエジー〉は近代の

10 『初版グリム童話集』第1巻(注1), 13 ページ。

11 *Die Bibel. Nach der Übersetzung Martin Luthers.* Hrsg. von der Evangelischen Kirche in Deutschland. Stuttgart: Deutsche Bibelgesellschaft, 1985. S. 61. 『聖書 新共同訳—旧約聖書続編つき』日本聖書協会, 1987・1988年, (旧) 97 ページ。

〈人為ポエジー〉より「純粹で良い」と考えていたこと、また、人類史を金属メタファーを用いて「金の時代、銀の時代、鉄の時代」へと下降してきたと捉え、「金は純粹でそれ自体で素晴らしく、不滅だ。鉄も本物で固有のものだが、より大幅に研磨や加工を受け、それによってより一層輝くけれど錆に負けもする」という歴史哲学を披露していることをも背景にしていよう。¹²

この〈純粹な〉滋養物ということに関しては、まだ18世紀においても母乳あるいは乳母の乳の代わりに〈人工的に〉調合し加工された代替物、すなわち穀物やビールを煮て作った粥が乳幼児には与えられていたこと、またそれによって乳児の死亡率が高かったことも念頭に置いておきたい。¹³ 牛乳や山羊の乳なども、19世紀半ばにパストゥール殺菌法が発明される以前は劣化が早く、食中毒など衛生上の危険が高かった。また、18世紀の医学では — 乳母の乳でさえ適切でなく — 母乳が最も衛生的であるとされ、ギリシア・ローマの古来から中世を通じて信じられてきた体液説に基づいて、乳児にとって母乳こそは神から与えられた唯一の滋養だと考えられていたのである。

とはいえ、メールヒェンは乳のように栄養価が高いため、過度に摂取して消化不良を起こすことには注意が必要だという。例えば、ヴィルヘルムはある友人に『グリン童話集』を送り、以下のようにメールヒェン集の使用方法を説明している。

きみの子どもたちが、この本『グリン童話集』からたくさん学んでくれるといいのだけれど。ほくたちは、この本が教育の書 (*Erziehungsbuch*) と見なされるということをはっきりと意図している。子どもたちがこの本を理解できるようになるまで、きみは差し当たり待っていなければならないが、その後は一度にたくさんではなく、少しずつ、いつもひと口ずつ、

12 Jacob Grimm an Arnim, 20.5.1811. Steig (wie Anm. 2), S. 117ff.

13 Vgl. Ulrike Prokop: Mutterschaft und Mutterschafts-Mythos im 18. Jahrhundert. In: Viktoria Schmidt-Linsenhoff (Hg.): *Sklavin oder Bürgerin? Französische Revolution und Neue Weiblichkeit 1760-1830*. Marburg: Jonas-Verlag, 1989. S. 190.

この甘い粥 (süße[n] Speise) を与えるようにしなくてはいけない。¹⁴

同じように、ヤーコブはアルニム夫妻に『グリム童話集』を薦めて、次のように述べていた。

もしきみたちがぼくたちの子どものメールヒェン (Kindermärchen) を読むとするなら、ほんの少しずつにしておいて、一度に読むようなことはしてはいけない。というのも、話は一つだけではなく、たくさんだからだ。毎晩1話か2,3話にしておかないと眠くなってしまうだろう。それは、ミルクはあまりにたくさん飲めないのと同じことで、メールヒェンは真のミルク粥 (Milchspeise) にほかならない。¹⁵

伝説においては、奇異な内容は嘔み碎いて消化し、人生経験と照らし合わせて理解されて初めて栄養となるが、メールヒェンは歯のない乳児でも飲み込むことができ、体に浸み込むとグリム兄弟は考えていた。しかし、言葉を理解し始め、メールヒェンの内容に関心を持つ発達段階になった子どもには、乳児とは異なるレベルのメールヒェン受容が想定されている。上述の引用に続けてヤーコブは、5ヶ月の乳児がいずれ言葉を使い始めるであろう時のことを想像して、次のように冗談めかして書いている。

さて半年後には自分の名前を言えるようになるであろうフライムントが、新しく生えてくる歯でこの干し草 [メールヒェンを指す] を熊手できるように熱心にかき集めたり投げ上げたりしてほしいものだ、[[『少年の魔法の角笛』に収録されている] 歌に出てくる酒飲み男のように。¹⁶

14 Wilhelm Grimm an Paul Wigand, 1.1.1813. Stengel (Hg.) (wie Anm. 6), S. 134.

15 Jacob Grimm an Arnim, 29.10.1811. Zitiert nach Steig (wie Anm. 2), S. 239.

16 Jacob Grimm an Arnim, 29.10.1812. Zitiert nach Steig (wie Anm. 2), S. 239. ここで暗示されているのは、アルニム/ブレンターノ編『少年の魔法の角笛』第1

この身体に重点が置かれたイメージから推測されるのは、子どもたちは大人が朗読あるいは再話するメールヒェンを、単に受動的また一方的に聞くのではなく、音声を耳と口を通じて積極的に摂取し消化するべきだと考えられていることである。すなわち、乳児であれ幼児であれ、語りを耳で聞き、内容を理解しようがしまいが、口を動かして真似るなどして諸感覚を動員する動的で全身的な行為なのだ。その音声は両親や祖父母などの具体的かつ個性的な声色を帯びており、身体的接触を伴って体温を感じたり、リズムに合わせて心地よく体を揺らしたりしてメールヒェンは体験されるのであり、それによって物語は血肉となり記憶は強固に定着するというのであろう。

グリム兄弟にとって、乳、特に母乳はメールヒェンの滋養の豊かさを表す最適のメタファーであった。母乳がさまざまな栄養分を含有する完全な食物として乳児の成長を支えることができるように、メールヒェンもさまざまなレベルで子どもの心身をはぐくむ総合的な滋養物だと考えられたのである。

3. 〈声〉のメタファーとしての母乳 — メディア

従来は口伝えで伝承してきたメールヒェンを、グリム兄弟は消失の危機から救って収集し活字に定着して保存した。しかし兄弟は、この『グリム童話集』を子どもの受容者は、まずは〈聞く〉のだと考えていたようだ。この観点から、『グリム童話集』に含まれる残酷性や性的要素を問題視した批判に対して、兄弟が次のように余裕をもって反論していたことも理解できる。

↙ 2巻の「酒宴の歌」の一節である。„Und wer es nicht kann kauen, / Der geh auch nicht zum Wein / Doch seh ich an Hauen / Daß wir gut Mäher sein : / Wir rechens mit den Zähnen, / Und worflens mit dem Glas / Der Magen muß sich dehnen, / Daß ers in Scheuer laß.“ Clemens Brentano: *Sämtliche Werke und Briefe*. Bd. 7: Des Knaben Wunderhorn. Alte deutsche Lieder. Teil II. Hrsg. von Heinz Rölleke. Stuttgart; Berlin; Köln; Mainz: Kohlhammer, 1976. S. 426.

このこと [『グリム童話集』が真の教育の書となること] に対して、いくつか当惑させる話があるとか、子どもにはふさわしくない、いやらしいとか [・・・]、そして親たちはこの本を直接子どもの手に渡したくない、と批判を受けました。個々の場合については、その心配も当然だということもあります。そういう時は、かまわず話を選ばれたらいいと思います。全体としては、そのような心配は不必要です。¹⁷

兄弟は当然の如く、子どもたちは自分でこの本を手にして自ら読むのではなく、大人が話を選択し、読み聞かせることを前提にしていたのである。すでに見たとおり、兄弟は『グリム童話集』を乳幼児を持つ友人に薦めていた。話の内容が理解されるか否かには無関係に、大人はごく早期に子どもに母語を語り掛けるようにメールヒェンを語り込むべきだと考えていたのである。

口伝による〈聞く〉ことへのこだわりは、近代の〈人為文化〉に生きる人間の近代的分裂の意識を、人間本来の〈自然性〉を再獲得することによって克服しようという、グリム兄弟の文化批判に基づくユートピア的思想と結びついている。それゆえ、兄弟の文献学的研究は、1800年期に広く共有された時代の危機意識と、現状改革を目指すさまざまな構想の文脈で捉える必要がある。人類が進歩の歴史の頂点に立ったかに見えた時代に、身分社会の不平等、自由を束縛する法律、形骸化した教養、専門化や分業による社会の分裂、頭と心と体の内面的分裂など、人間は〈本来の〉あり方、健全な〈自然〉から離れてしまったという近代の弊害が痛切に実感され、この墮落以前の過去がしきりに参照された。それは古代ギリシア、〈善良な野蛮人〉、カトリックの中世ヨーロッパなどさまざまであったが、グリム兄弟によるドイツ・ゲルマン的古代への関心もその一つだったのである。

すでに見たように、ヤーコプは「祖国の歴史やポエジーは [・・・]、いわば母乳と共に吸い込まなければならないし、家で語られ、話し合われなけれ

17 グリム兄弟 (吉原高志/吉原素子訳) 『初版グリム童話集』第4巻 (白水Uブックス 2008年)、10ページ。

ばならない。しかし、すべては自然に、自ずからなるように」と述べた。¹⁸ メールヒェンも、活字を通して、あるいは個人的な黙読によってではなく、親密な家庭の団欒において、何らかの教育的意図や利害関係とは無縁で自由な空間において、声を使って語られ、耳で聞かれ、話し合われることが望ましい。この口頭でのやり取りを通じてのみ、メールヒェンは無意識的に受容される。メールヒェンは母語と同じく、母乳が子どもの身体に流し込まれるように、¹⁹ 人為的な取捨選択を経ることなく、声で子どもの耳に語り込まれるのが理想的な〈自然な〉受容のあり方だというのだ。

メールヒェンは、「心に直接語りかける声」²⁰ によって語られる。本来、「ポエジーは単純で明瞭に、誰にとってもわかりやすく、心情に入り込んでいくように話す」という。²¹ 声は、理性的反省を介さずに、無自覚的に聞かれるだけでなく、頭で理解されることを必要とせず直接心に到達する。このメディアは、父親およびその他の男性よりもずっと長時間かつ集中的に子どもと接している、母親あるいは乳母や祖母などの女性が物語を語ったりわらべ歌を歌ったりするとき、最大の効果を上げることになる。そして、子どもは「聞きたいという内面の欲求」²² でもって一心に聞き、ここに愛情に満ちた相互のコミュニケーションが成立するというのである。

〈声〉は単に物語の内容を伝えるだけのメディアではない。メールヒェンの語りの実践においては、授乳が生理的栄養を供給するだけにとどまらない行為であるように、声を通じて文学の美、倫理感、感情、身体、民族文化、想像力、言語感覚など、さまざまなレベルでの伝達が行われ、語り手と聞き手、両親や祖父母と子、共同体成員同士などの間にはさまざまな関係が形成される。

18 注8を参照。

19 注9を参照。

20 『初版グリム童話集』第1巻(注1)、16ページ。

21 Wilhelm Grimm: Über die Entstehung der altdeutschen Poesie und ihr Verhältnis zu der nordischen (1808). Wilhelm Grimm: *Kleinere Schriften*. Bd. 1. Nach der Ausgabe von Gustav Hinrichs neu hrsg. von Otfrid Ehrismann. Hildesheim; Zürich; New York: Olms-Weidmann, 1992. S. 120.

22 Grimm an Arnim, 29.10.1812. Zitiert nach Steig (wie Anm. 2), S. 237.

〈声〉は、頭と心と体に同時に語りかけることができるだけでなく、重層的な諸要素を一度に伝えることができるのだ。このようにして〈自然ポエジー〉を〈自然に〉取り込み、全人的な自己形成を可能とすることこそは、『グリム童話集』を「教育の書」と呼ぶグリム兄弟の願望の一つであったと思われる。

4. 〈新しい母性〉のメタファーとしての母乳 — イデオロギー

ヨーロッパの18世紀は、地域的に進行の度合いは著しく異なっていたが、生産技術や経済システムなどの変化や新しい自然科学の知見や啓蒙思想の浸透によって、社会全体が技術的・制度的・世界観的に大きく変わる激動の時代だった。その中で家族形態も変化し、人間の〈本来の〉あり方への省察も高まって子ども期が注目され、家庭内での母の性質や役割も新たに規定されていた。その際には、母は — 上流階層の母であっても — 自分の子どもに自分で授乳すべきだという要請が主柱となったが、この啓蒙的な〈新しい母性〉観は、教育思想、医学、政治実践と密接に協働して〈授乳イデオロギー〉とでもいう思想を形成していたのである。〈授乳〉をめぐるこの〈新しい母性〉のディスクールは、19世紀初頭のグリム兄弟による新たなメールヒェン受容の考えにも大きく影響していると思われる。

18世紀後半の医学著述物において、母乳による哺育こそは、生物学上〈自然な〉方法でもあるのだから、唯一の安全な乳児養育の方法であるとして称揚されていた。母に対しては自分で授乳することが喫緊の課題とされ、母乳哺育は〈道徳的義務〉、〈最も神聖な職務〉へと高められていった。「自然」は「キリスト教徒で理性的な母の一人ひとりに、[・・・]自分の子どもを自分で授乳するという義務を負わせた。」自分で授乳するという事は、「女の肉体的かつ自然な定め」の一部をなすというのである。²³ 授乳が〈自然〉であるという

23 Sabine Toppe : *Die Erziehung zur guten Mutter : medizinisch-pädagogische Anleitung zur Mutterschaft im 18. Jahrhundert.* Oldenburg : BIS-Verlag, 1993. S. 146.

ことを確証するために、哺乳動物の例を引き合いに出して、人間の母にも〈母性本能〉あるいは〈母性愛本能〉が備わっていると主張する医師もいた。²⁴ さらに、〈未開民族 (Naturvolk)〉の女性も参照され、人間が自分の子どもに自分で授乳することは〈自然法則〉であると喧伝されたのである。²⁵

母乳こそが最高の滋養物であるという思想は、授乳する女性の性格が乳を通じて乳児に受け継がれるという当時の医学理論が信奉されていたことにも起因している。²⁶ 18世紀には、乳母は — 自分の子どもをないがしろにして雇われるから — 人格的に低く見られており、金銭欲に駆られ、愛情が欠如していて、何らかの病気を運びかねないと思われることがあっただけに、子どもの性格と健康にとって危険でさえあったのだ。さらに、疑似医学的な根拠に基づいて、母乳は乳児の体液と厳密に調和した無二の「精神的混合物」と考えられていた。この理論によると、人間より強靱な胃に合った動物の乳は粗雑すぎるから子どもには与えるべきでないし、母乳は常時子どもの体の発達に適合するように成分が変化するので、乳母の乳も子どもの哺育には適していないとされるのである。²⁷

授乳をめぐる教育思想上の主張も、母乳をめぐる医学論争と密接な関係にあった。授乳による母子の〈自然な〉結合こそは、子どもの教育の始まりであり基礎となると考えられたからだ。ルソーは『エミール』で、乳母を雇い、自分で子どもを育てようとしない上流階層の〈墮落した〉女性たち、「子どもをやっかいばらいして、陽気に都会の楽しみにふけているやさしい母たち」²⁸ を非難し、次のように書いている。

子どもに乳をやることをやめてしまったばかりでなく、女性は子どもをつくろうともしなくなった。それは当然の結果だ。母親の仕事がやっかいに

24 Toppe (wie Anm. 23), S. 148.

25 Toppe (wie Anm. 23), S. 148.

26 Toppe (wie Anm. 23), S. 139, 149.

27 Toppe (wie Anm. 23), S. 149.

28 ルソー (今野一雄訳) 『エミール』(上) (岩波文庫 1962年), 44 ページ。

なると、やがて完全にそれをまぬがれる手段をみつけだす。女性たちはつくったものをだめにし、たえずそういうことをくりかえそうとしている。そして、人類をふやすためにあたえられた魅力を人類の害になるようにもちいている。²⁹

とはいえ、いまでもときどき、すぐれた天性にめぐまれた若い人があって、流行の権威と同性の非難にもかかわらず、自然が命じているやさしい義務を健気にもはたしている。それを実行する人にあたえられる幸福に心をひかれて、そういう人たちの数がふえていくことが望ましい。³⁰

女性は母となり自分で子どもを育てることが〈自然〉によって定められた義務だというのだ。³¹

ルソーにおける理想的な母親像は、授乳を基盤にして描き出されている。

ところが、母親が〔乳母を雇うのではなく〕すすんで子どもを自分で育てることになれば、風儀はひとりでに改まり、自然の感情がすべての人の心によみがえってくる。国は人口がふえてくる。この最初の点が、この点だけがあらゆるものをふたたび結びつけることになる。家庭生活の魅力は悪習に対する最良の解毒剤である。わずらわしく思われる子どもたちの騒ぎも愉快になってくる。父と母はますますたがいに離れがたく睦み合うようになる。夫婦の絆はいっそう堅くなる。家庭が生き生きとしてにぎやかになれば、家事は妻のなによりも大切な仕事になり、夫のなによりも快い楽しみになる。こうして、ただ一つの欠点が改められることによって、やがて一般的な改革もたらされ、自然はやがてそのすべての権利を回復す

29 同上、45-46 ページ。

30 同上、50 ページ。

31 母による授乳を主張し、母乳を自然が子どものためにと定めた滋養であると称揚する思想は、例えばカントにも見られる。Vgl. Toppe (wie Anm. 23), S. 147.

る。³²

母が授乳しないことは社会の諸悪の根源とされ、それは子どもの教育だけにとどまらず、家庭そして国家の安寧にまでかかわる問題だというのだ。

もし母乳が健全な状態ではない場合には、乳母の乳あるいは動物の乳で代用することは可能だが、「母親の心づかい」は何物でも代替することはできない、とルソーは言う。³³ 乳母は他人の子どもの母代わり役であるから、子どもを愛そうとする自然な衝動に欠け、愛そうとする努力も不足がちになる。しかし、母が〈自然の義務〉を愛情をこめて果たすならば、子どもは人間同士の絆が自然なものであると思えるようになる。このように、母乳は子どもに義務意識と親密感情を送り込むのだとルソーは考えていた。³⁴

さらに、授乳と〈新しい母性〉は、現実の政治的利害の見地からも要請されていた。例えば、18世紀には出産と産児調節は政治の重要な案件であった。なぜなら、短い期間に何回も妊娠が繰り返されることは成人女性の生命をも危うくするし、統制なく出産が続くような多産は、女性に高度な職業訓練を施しても無駄になってしまうことを意味するからだ。³⁵ また、啓蒙主義者にとって人口は国家の富に比例しており、人口政策上、国家が生産を増強し、より多くの税金を徴収し、兵士を補強することが望まれた。それゆえ、啓蒙専制君主フリードリヒ大王統治下のプロイセンでは、未婚の母に対する罪は軽減され、その代わりに嬰兒殺しを犯した母は宗教的理由によるのみならず、政治的関心に照らして厳罰に処されたのである。また、子どもを産もうとしない女性は、社会から道徳的な制裁が加えられることになったのだ。³⁶

母の授乳については、『プロイセン一般ラント法』（1794年）では次のよう

32 ルソー（注28）、49-50ページ。

33 同上、47ページ。

34 Vgl. Barbara Vinken: *Die deutsche Mutter. Der lange Schatten eines Mythos.* Frankfurt/M.: Fischer, 2007. S. 134f.

35 Prokop (wie Anm. 13), S. 193.

36 Prokop (wie Anm. 13), S. 194.

に明記されている。

- § 67. 健康な母親は自分の子どもに自分で授乳するよう義務付けられている。
- § 68. 母親が子どもに授乳する期間は、父親が決定する。
- § 69. しかし、母体あるいは子どもの健康が父の決定によって損なわれる場合、父親は専門家の鑑定に従わなければならない。³⁷

女性は国家のために有用な臣民を育成すべく、自分の子どもに授乳することが国家によって義務付けられており、これは法律で定められている。そして、女性は育児方法を自分で決定することができず、家父長である夫、あるいは知を独占する（男性の）〈専門家〉の決定に従わなければ法的に罰せられるというのである。

この政策の普及には、1730年以降ドイツで流行した道徳的内容の濃い週刊紙も一役買っていた。このメディアがイギリスで発生した近代小家族の観念を人々に伝えたほか、18世紀後半にはルソーの思想を広めたのだ。それによって公共圏で世論が形成され、女性と家庭はますます政治のテーマとなっていったのである。

18世紀の授乳をめぐるディスクールと照らし合わせると、グリム兄弟も〈新しい母性〉の思想圏内で母乳メタファーを使用していることがわかる。兄弟も上流階層の女性たちに〈非自然性〉を感じていたし、母親が授乳することを自然で本来的な母子関係の基礎と見ており、近代の核家族を新たな〈自然な〉教育の場と捉えていたのである。

37 Zitiert nach Toppe (wie Anm. 23), S. 187. Allgemeines Landrecht für Preußischen Staaten (1794). Zweyter Theil, zweyter Titel: Von den wechselseitigen Rechten und Pflichten der Aeltern und Kinder. Zweyter Abschnitt.

5. 文字を口承に変換する母 — 近代市民社会の〈新しい語り手〉

グリム兄弟は、古代から口承で伝えられてきた〈自然ポエジー〉を近代社会において再活性化する可能性をまだ信じており、近代人が〈古代〉にいわば接続しようと考えていたと思われる。³⁸ 例えばヤーコプは、忘れられている古い文字記録を掘り起こし、近代人の自己理解に活かす文献学の意義について、次のように述べている。

埋もれてはいるが、岩の間で損なわれることなく保たれている源泉を見つけ出し、開くこと [・・・]。泉が再び流れ始めさえすれば、泉は固有の推進力に任せて、流路を探せばいい。[・・・] 私たちは、昔の詩人が美しく言い表したように、眠っている文字が再び目覚まされ、陰に隠れていた甘い教えが再び明るみに出されるために貢献したい。³⁹

文字で残された文献とは異なり、メールヒェンなどの口頭伝承は 1800 年ごろのドイツの民衆の間では、細々とではあってもまだ語り続けられている〈現在の〉文芸であったから、メールヒェンは集めて出版すれば、再び活性化するのはずっと容易なことと思われたであろう。

グリム兄弟は、メールヒェンの中に古代ゲルマン神話の名残りを認め、⁴⁰ また、古来変わらない生活を続けていると思われた民衆が〈古代〉の伝承を保持していると考え、その実証を語り手ドロテア・フィーマンの正確な語りに見出していった。⁴¹ すなわち、メールヒェンが伝える〈古代〉は現在においては完

38 Vgl. Isamitsu Murayama: *Poesie – Natur – Kinder. Die Brüder Grimm und ihre Idee einer 'natürlichen Bildung' in den „Kinder- und Hausmärchen.“* Heidelberg: Winter, 2005. S. 166, 216.

39 Jacob Grimm: *Vorrede zum ersten Band der Altdeutschen Wälder* (1813). JGKS VIII/1, S. 6.

40 『初版グリム童話集』第4巻(注17), 9-10 ページ。

41 同上, 8 ページ。

全に失われたのではない。近代ドイツ人は、もともと異文化のギリシア・ローマの古典古代とは断絶しているが、自文化の（ドイツ・ゲルマン的）古代にはまだつながりうる、とグリム兄弟には思われたのだ。

グリム兄弟における〈古代〉のイメージは、ゲルマン的古代やギリシアの古典古代、聖書が語る人間の原初状態、航海誌の伝える〈未開民族〉などが混淆しており、明確に規定することは難しいが、近代的分裂とは無縁の、人類の始原の状態に近いという性質を共通項に、漠然とまとまっている。兄弟はさらに、〈古代人〉と民衆、子どもの間にも親縁性を見ていた。すなわち、〈古代人〉は人類史の始原の存在、子どもは個人史的に見て人間の最初期の状態、民衆は近代社会の周縁部の伝統社会で〈古代〉から変わらない生活をしている人びとであると捉えられた。〈民衆〉は自然の中で暮らし、文字に支えられた外来の教養に毒されておらず、〈古代人〉と連続性を持つ、いわば〈近代の古代人〉であると美化され、それによって近代人は〈民衆〉を通じて〈古代〉に接続しうると考えられているのである。⁴²

この〈古代人〉、子ども、民衆に共通性を見出すアナロジーは — 特にヤーコプによって — さらに、〈自然に近い性〉、反省的教養に縁遠い存在と思われた〈女性〉にまで適用されている。ヤーコプは女性を、男性とは異なる原理で生きる人びとと捉えていることが、以下の引用から窺える。

女性たちはあるもの、それを私は低俗だとか取るに足らないとか思っているわけではないのだが、そういうものほとんど常にとでもはっきりと見ているが、その代わり他のものは全く見ていないように思われる。彼女たちによる批評は、私にとっては月光のようだ。その光の下では、私は読むことはできないし、日中にするようには考えたりもできない。より輝いてはいるが、それだけより単調で、いくつかの色はまったく消え失せている。
[・・・] このこと [ヤーコプが本で得た知識] が私に教えてくれるのは、

42 Vgl. Murayama (wie Anm. 38), S. 239ff.

女性たちはいつも大きな、幸運なケースでは無意識的で神聖な力を生に及ぼしてきたものの、偉業が彼女たちによってなしとげられることはなかったということだ。ポエジーにおいては、女性たちは特に古い言い伝えを語り伝え、保持してきた。いわばこの朝露がなかったら大部分のものが干からびずにはいなかっただろう。しかし、彼女たちがこれまで詩作したことがあるとは言えない。⁴³

この両義的というよりは否定的な女性観においては、女性は男性には容易に理解できない〈男性の他者〉として表象されている。女性は、理性的に考えたり歴史的偉業を達成したり、文学作品を創造したりすることができないという、まさにこの否定的性質のゆえに、逆説的に特別な性質を有する存在とされる。すなわち、書物による教養が支配する近代市民社会にあって、内発的衝動に導かれて、今なお自然に近い性質を保持している人びとだと見なされるのである。この意味で、ヤーコブは次のように述べている。

多くの人たちによって観察されたことだが、学校で苦しめられることにより少ない少女や女性は、言葉をこざっぱりと話したり、優美に使ったり、より自然に選んだりすることを心得ている、ということは重要だし異論の余地がない。なぜなら、彼女たちは内面から湧き出てくる欲求の方につき従って自己形成するからだ [・・・]。⁴⁴

このような善意を伴う偏見を通じて、女性は〈古代〉につながる〈自然性〉と近代の〈人為文化〉の両方に属する存在として、両方の領域を仲介する特別な位置に置かれる。それゆえ近代市民社会の女性は — 同じく自然に近いとされる子どもや民衆とは異なり —、『グリム童話集』を〈読み〉、朗読や再話を通じて〈語り〉、それによって文字で固定されたメールヒェンを再び〈声の文

43 Jacob Grimm an Arnim, Juli 1811. Zitiert nach Steig (wie Anm. 2), S. 141.

44 Jacob Grimm (wie Anm. 5), S. 31.

化)へと溶かし出すことができると考えられた。こうして、近代人が〈古代〉と接続し、近代と〈古代〉の間には連続性が、わずかではあれ再生するのではないか。— この視点からグリム兄弟は、〈人為文化〉に属する書物をいわば〈自然化〉するという役割を女性に期待したのではないかと思われるのだ。⁴⁵

書物になったメールヒェンの受容者としては、子どもが重要になる。グリム兄弟にとって、小さい子どもこそは大人とも民衆とも異なり、無自覚的に、悟性の検閲なしにメールヒェンの朗読や再話を聞くことができる人びとである。それゆえ、近代人による〈自然性〉の再獲得はただちに社会全体で実現されるのではなく、まずは愛情によって結び付けられた核家族の中で、特に母子関係において、授乳するかのように〈自然ポエジー〉を子どもの耳に語り込むことによって実施されるのだ。

また、〈自然ポエジー〉の中でもメールヒェンは特別な地位を占めることになる。メールヒェンこそは、グリム兄弟が〈民衆ポエジー〉に算入する伝説、神話、叙事詩、民衆本などの中で、民謡と並んで唯一生き残った文学ジャンルとされるとともに、⁴⁶ わらべ歌と並んで19世紀の家庭での〈声の文化〉が実践される唯一の〈自然ポエジー〉だったのであろう。

兄弟は民衆の間で息づいてきたメールヒェンを収集し、近代人に異質性を提示する古代の名残りを尊重して出版したと自負していた。メールヒェンは近代の子どもに適した読み物として発案されたものではないのだから、一見子どもにとって有害だと思われる要素が見られるとしても、それは〈自然〉の一部であるから懸念は不要だと主張してもいた。⁴⁷ しかし、この立場とは矛盾するように見えるが、兄弟はすでに『グリム童話集』出版以前から、この本が近代市民社会の小家族の家庭で大人、特に母が子どもに読みきかせることを当然のこ

45 バーバラ・フィンケンは、ルソーが母親を、文化を自然化する存在と捉えていたと指摘している。Vinken (wie Anm. 34), S. 134. ルソーの母親観がグリム兄弟のそれにも響いていると言えよう。

46 『初版グリム童話集』第1巻(注1), 11ページ。

47 グリム兄弟(吉原高志/吉原素子訳)『初版グリム童話集』第4巻(白水Uブックス 2008年), 10ページ。

とと考えていたのである。⁴⁸ それは、兄弟が文献学全般、特にメールヒェン集を近代批判的意識から構想しており、近代人に〈古代〉と接続しうる可能性を示し、〈自然〉を再獲得して近代的分裂を克服するよう促す、彼らのユートピア思想から発している。そこで注目されたのが、授乳する母のような女性たちだったのであり、ここに、メールヒェンと女性の結合を強化したグリム兄弟のジェンダー観も明瞭に表れているのである。

——文学部教授——

48 それゆえ、グリム兄弟は『グリム童話集』出版後の批判を受けてから、あるいは第2版において初めて子どもの読者を意識するようになった、という通説は再考されねばならない。